

栽培環境がマンデビラの開花数に及ぼす影響（受託試験）

岡澤立夫・和泉吉隆

（生産技術科）

【要約】マンデビラの開花には、十分な光強度と日照時間が必要であり、地温の影響は少ない。特にミニ系では多くの日照時間を必要とする。従って観賞場面におけるミニ系の不開花現象は、十分な光強度と日照時間が確保できれば回避できる。

【目的】

マンデビラは新規品目として注目されているものの一つであり、高温時に鉢花等の出荷が限定される中、都内における取組みも増えつつある。しかし、最近出されたマンデビラ(サンパラスル)ミニ系2品種は、真夏以降に開花しないという現象が多発し問題となっている。そこで、マンデビラの栽培および開花特性について調査するとともに、日射量が開花に与える影響を検証する。

【方法】

供試品種は、サンパラスルシリーズ‘ホワイト、クリムゾン、クリムゾンキング、レッドミニ、トロピカルピーチミニ’（サントリー）、‘サマードレス、ルビースター’（とみたフラワー）。3.5号ポリポット苗を5月17日に8号鉢に鉢上げし、行灯仕立てとした。日照時間は、午前区は午後100%遮光資材で日が当たらないようにし、遮光区は50%遮光資材で終日被覆することで調整し、一日区は遮光資材で特に被覆せず自然のままとした。

【成果の概要】

- 1) ‘クリムゾンキング’を除くすべての品種で6～7月にかけて開花数の最初のピークを迎えた。‘ピーチミニ’が最も早く6月下旬で、その他品種では7月下旬～8月上旬であった。8月上旬中旬、開花数は一端大幅に減少するが、9月下旬まで増加する。9月下旬～10月下旬にかけて‘ピーチミニ、レッドミニ、ルビースター’は開花数減少がみられ、特にミニ系で顕著である。その他では同等か、やや増加にとどまる（図1）。
- 2) 7月中旬まで、試験区間で開花数に違いはなかったが、その後は一日区>午前区>遮光区の順で高かった（図1）。図2の結果を考えると、特にミニ系では開花に少なくとも快晴日で $400 \mu \text{mol m}^{-2} \text{s}^{-1}$ 以上の光強度が必要で、7時間日照は不十分であった。一方、‘サマードレス’は遮光区でも8月以降開花し、一日区と午前区の差がわずかだったことから、他品種ほど開花に光が必要でないことが推定された。
- 3) 地温は午前区と遮光区で違いはなかったが、一日区では最高で $40^{\circ}\text{C}$ を超え、 $5^{\circ}\text{C}$ 以上の差がみられた（図3）。しかし、7月以降の開花数が総じて一日区で高かったことから、地温が開花に及ぼす影響は低いと考えられる。
- 4) まとめ：本年は比較的冷夏で、ミニ系の高温下における不開花現象は確認できなかった。しかし、地温 $40^{\circ}\text{C}$ を超す日が続いても一日区で開花数が多かったことから地温の影響は少ないと考えられた。また、ミニ系では遮光処理で開花が強く抑制されたことから、開花には潤沢な光強度と日照時間が必要であることが推定された。従って、鑑賞する場面で十分日の当たるところで管理すればミニ系の不開花は回避できると考えられた。

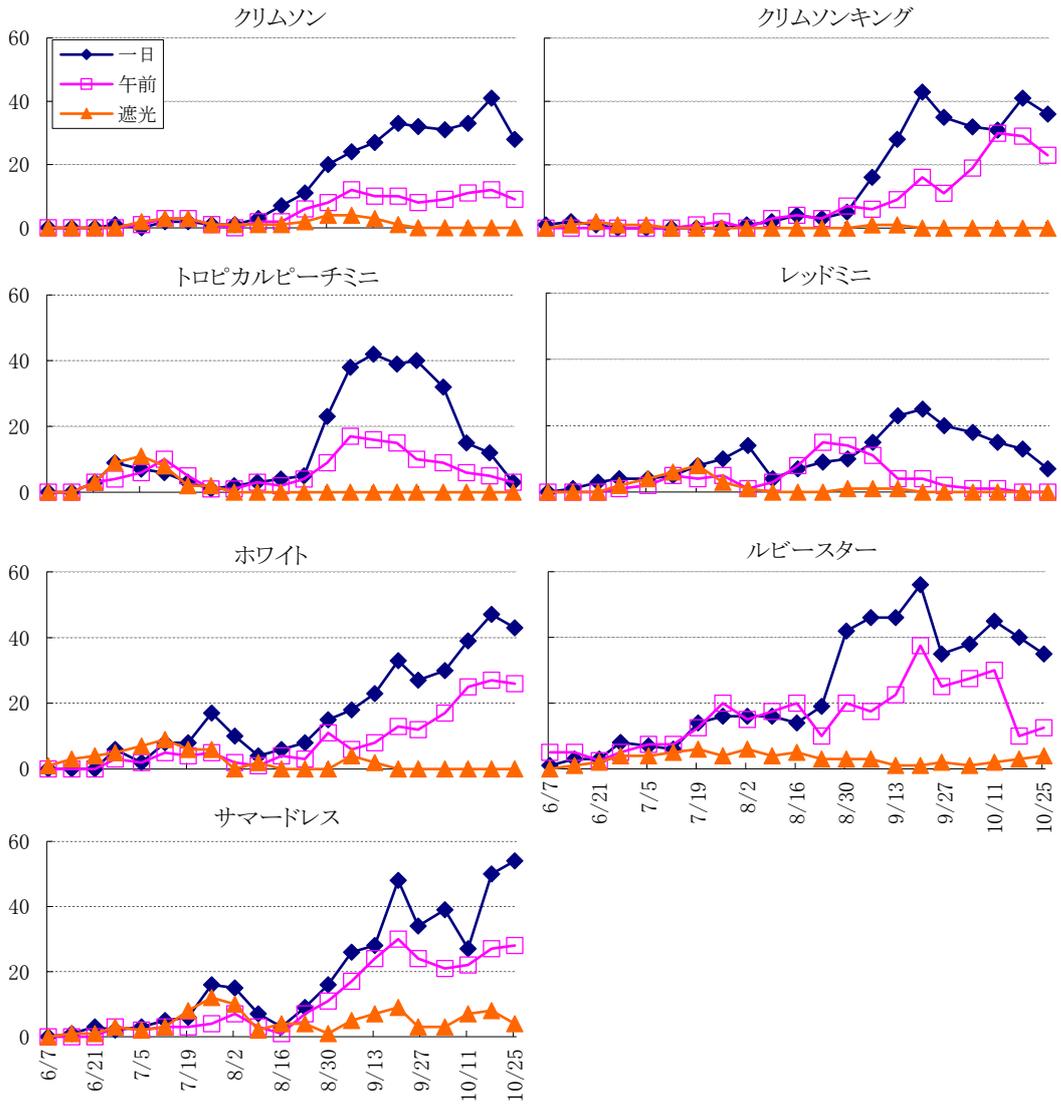


図1 各処理区における開花数の変化  
 注1) 横軸は日付(月日)、縦軸は5株の合計開花数(輪)で調査日に開花しているもの開花とした  
 注2) グラフの上は品種名

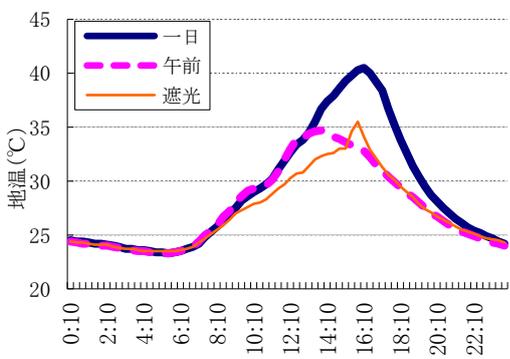
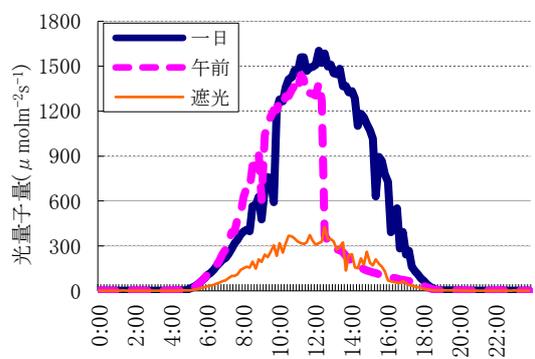


図2 各処理区における光量子量の変化(8/4) 図3 各処理区における地温の変化(7/26)